

うとしました。しかし、アメリカが日本に原爆を落としたので、まだ時期尚早だとして出版しなかったのです。それから60年以上たちますが、この言葉はこんにちますます重要になっているように思えます。

この「一つの世界とともに生きることを学ぶ」ということは、「和諧社会」と関係があるのでし

ょうか。最後のスライドの左側の写真は、麗江古城の広場で、観光客とナシ族の人が輪になって踊っている様子です。これは「和諧社会」のイメージなのではないでしょうか。一つの問題提起としておきたいと思います。

○座長 谢谢山下教授！非常令人启发，印象深刻的的一个报告。接下来我们邀请上田老师发言。

「模索する雲南チベット族」

上田 信（立教大学）

今日は、このような場にお招きいただきまして、本当にありがとうございます。中国を学ぶ者として、愛知大学は非常に崇高な1つのセンター、戦前の東亜同文書院からの歴史もありますし、日々、私が史料を読むときに恩恵を受けている『中日大辞典』も愛知大学のものですから、かねがね愛知大学にはいつかはと思いながら、今日、初めて呼ばれて参りました。この機会を与えられたことを感謝申し上げたいと思います。

私は歴史をやっております。歴史とは、いつ、どこで、誰が、何をしたというところから入っていきますので、非常に具体的なところから話を立ち上げていきたいと思います。

今日の話題の中心は、雲南省の西北部の、かつて中甸県と言っていたところで、現在は、香格里拉（シャングリラ）県と名前を改めています。場所は、先ほど話に出ました麗江の隣になります。今は高速道路等ができて道もよくなり、速く行けるようになりましたので、おそらく車で3時間から4時間程度でたどり着けるかと思います。

私自身、2004年に1年間、昆明で生活していたときに、しばしばここには行きました。ちょうど観光開発が進む真ただ中の状態で、その後、2005年、2006年と、毎年、この地域を訪れてはいろいろな人から話を聞くということがありました。

実際に見ていきますと、地方政府主導の観光開発が、さまざまな問題を引き起こしていることを非常に強く感じました。先ほど生態環境の劣化ということで、麗江においても水が悪くなっている

という話がありました。ここも5つ星級のホテル等がいくつも建ち、そこから出る排水が町を流れている河川を見るからに汚しているという感じがあります。伝統的な街並みの破壊も進んでいきました。雲南で生活してみると、麗江があまりにも成功してしまったために、「麗江モデル」とでも言いましょうか、地方政府は「麗江に学べ」というかたちで観光開発をします。麗江も町の古城をどんどんと外に向けて広げていっています。古城とは言っても、古い街並み風にした地域が非常に広がっています。本来の街並みを壊して、古い街並み風のものに建て直すという動きが見られています。そのため、伝統芸能、生活文化もまた変容しています。

先ほど「主体は何か」という話がありましたが、私の今日の話題の主体は、雲南に住むチベット族です。簡単に説明しますと、雲南のチベット族は、非常に立体的な自然環境のなかで生活しています。そして、ナシ族やリス族という民族と一緒に生活しています。そのなかで、さまざまな文化的な交流をしながら、非常に豊かな文化をつくってきたことが、チベット族の1つの伝統だと思います。

ここが雲南省になります。今日のお話をするとここがこのあたりです。雲南省の西北になりますが、迪慶（Diqing）というチベット族の自治州があるところです。見ておわかりのように、非常に山あり谷ありで、谷から上までが数千メートルという標高差があります。例えば、この「シャングリラ」と書いてあるところから、2番目の話題に

なる迪慶へ行くには、まず山を下りて深い谷を越え、さらに雪山を越えて、ここにたどり着くという感じになります。



2004年の3月、ここにいましたら雪が降り帰るに帰れなくなりました。ちょうどこのあたりに大雪が降ってバスが通らないという状況で4日ぐらい足止めになり、日本に帰れるのだろうかと非常に不安になったことがありました。このような環境です。

この上にあるのがカクボ（太子雪）山で、6千数百メートルの雲南最高峰の山です。この下に流れているのが瀾滄江（lan cang jiang）というメコン河の上流になります。そして、その谷から少し上がったところに、このようなかたちでチベット族の村落があります。この山のちょうど奥側にある明永という村落には非常に有名な氷河の基地があるということで、観光のメッカになっています。

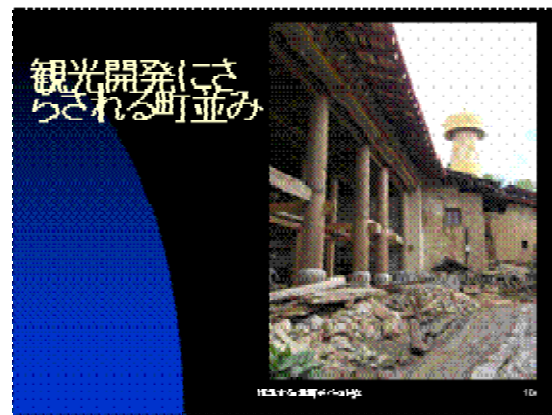
このなかで、文化的に言うと、ここの松贊林寺（song zan lin si）というお寺はもともとゲルク派の寺院です。もともとこの地域はさまざまなチベット仏教の宗派がありました。17世紀に、清朝の後ろ盾を得たゲルク派が勢力を拡大したときに、雲南を抑えていくなかで、この地域がゲルク派の支配下に入ってきます。この地域に住んでいる一般の人が信仰しているのはチベット仏教のなかでもゲルク派の宗派になります。

そして、雲南のチベット族の文化的な特色は、神さまの山に対する信仰です。これはチベット族に広く見られます。チベット族全体が信仰する山、1つの地域の住民が信仰する山、1つの村の人たちが信仰する山、さらには村のなかの1つの地区が信仰する山、各家が信仰する山というように、

それぞれ信仰する山があり、その信仰する山の周辺の山林には手をつけません。絶対に伐採してはいけない神さまのための地域があるということでした。

しかし、中華人民共和国になってからは、なかなか文化の継承がうまくいかないことがあります。1つには、学校などで中国語（漢語）は教えますが、チベット語はなかなか教えないということがありました。ほかのチベット族の地域に比べ、雲南は漢語の教育が中心になり、チベット語の教育があまりおこなわれていない印象を受けます。そして、生態環境が劣化し、急速な観光開発が進んでいるということがありました。

そのようななかで、伝統と経済的な生活向上、あるいは生態環境の保全をどのようにして併存させ、共存させていくかということが、直面している課題になるかと思えます。



例えば、「観光開発にさらされる街並み」と書きましたが、ここの左側にあるのは、2004年に撮った写真です。本来、ここにはかなり立派な、奥行きのある深い伝統的な民居がありました。それを壊して店屋にしたわけです。街路に対してオープンにして、観光客が入りやすい街並みに建て替えていくということで、伝統的な街並みが壊されていくということがありました。

これは2006年、夜に撮った写真です。先ほど「麗江モデル」と言いましたが、街並みが壊されたあとに、チベット風の古いような雰囲気をもった店屋が並んでいます。その前に、もともとここにも家があったわけですが、強引に広場にして、そこで毎晩、観光客と地元の人が一緒に踊ることによって、観光客を喜ばせるという行事がおこなわれています。当然、このようにして踊っている

現地の人もいますし、このへんの方は、おそらく観光客でしょうか。このようなことにもなっています。



2004年から系統的に長く見ていますと、これでいいのでしょうかと思います。踊っている人は非常に楽しそうですが、昔、ここにどのような家があったのかということを知っていると考えてしまうことがありました。

このような状況のなかで、主体の側になるかと思いますが、さまざまな考えを持っているチベット族の人がいろいろな動きをしています。その1つとして、「シャングリラ民間自然保護協会」があります。これは現地の有識者による活動です。そのネットワークは外に広がっています。今、音楽が聞こえています。これはチベットの地元の音楽です。そして、エコ・ツーリズムによって活動が支えられています。その拠点としては、このシャングリラの端にあるカフェになります。チベット・カフェ（西藏珈琲館）と言っていますが、おそらくシャングリラに行ったバックパッカーの人は、だいたいここで食事をしたり、コーヒーを飲んだり、泊まったりしています。

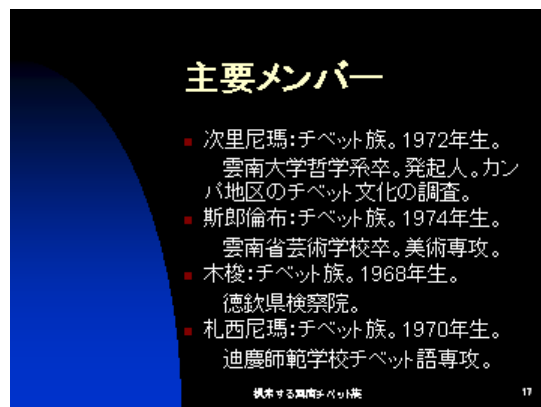


こちらの前に、コーヒーを飲むレストランがあ

ります。後ろ側に白く見えるのが、居住区になります。ここのオーナーである扎西多吉(ザシトジ)さんが、このNGOのリーダーです。このNGOは、要するに海外の方々がエコ・ツーリズムの企画を立てるときに、そのエコ・ツーリズムを受け入れる農家の生活向上を、エコ・ツーリズムに絡めていくものです。要するに、単に自分たちの文化を守るだけではなく、外の視点を入れながら、海外の観光客をエコ・ツーリズムとして、本当の自分たちの文化に触れさせたいという思いで進めている活動です。

そして、その活動のなかで得た資金を、貧困地域の子どものための教育資金にしたり、あるいは生活環境を改善するために使ったり、ビニールハウスのようなものをつくることによって農業的な発展にも利用しています。ここのカフェに寄ると、そのような情報が壁中にはつてあります。ある意味で、このカフェは情報発信センターになっているわけです。「このカフェは、単にお客さんをお呼びだけではなくて、さまざまなNGO的な活動をしているのだな」ということが、見てすぐにわかります。聞いた話によると、そのようなところに感銘を受けた海外の旅行客が、オランダなど、ヨーロッパの方が大きな金額の寄付をしてくれたり、その寄付によって貧困地域の生活向上に役立てていくというかたちを取っています。

ヨーロッパの方、特にドイツの方などは、チベット文化に対して非常に興味があるようです。このようなところに行くことによって、このような活動に入っていききっかけを与えてもらっているようです。



もう1つは、カワクボ文化社です。これは谷を越えてたどり着く迪慶でおこなっているNGO

です。30歳代ぐらいの若い人たちが考えてやっているようです。1999年に、次里尼瑪さんという方と、斯郎倫布さんの2人が中心になって興したNGOです。彼らが、なぜこのようなものをつくりたいと思ったかという、雲南大学の哲学系と雲南芸術学校を卒業と書いてありますが、自分の住んでいるところを一步出たときに、自分たちがいかに文化を継承していないかということにまざまざと気づいたというのです。自分たちのところに住んでいるだけでは、それはわかりませんが、昆明に出ると、ほかの少数民族、ナシ族やペー族というような人たちは、自分たちの文化を自覚しています。あるいは、南のほうのタイ族は、自分たちの文字を知っているということを知ってチベット族は自分たちの文字を読み書きできないということに気づいて愕然とするわけです。

そこで、このグループは、チベット語が読み書きできる自学自習の場をつくりたいと活動をし始めました。中国の場合、このようなNGOは任意団体としてなかなか活動できません。県の政府に登録するのにかなり大変だったようですが、登録が成功しています。カワクボ文化社は、このような方々が中心になっておこなっています。

<カワクボ文化社「藏族民間音楽」>



例えば、この音楽は地元の音楽です。このチベット族の観光開発を見ていきますと、四川省の九寨溝などは先に観光化されていますので、中国でチベット文化というと、九寨溝でつくられたディスコ風の音楽、チベット風の音楽が流布してしまっています。観光客が来ると、漢族社会のなかで流布したステレオタイプのチベット文化みたい

なものに擦り寄っていく傾向が見られます。この人たちは、そのことに非常に危機感を持ち、自分たちの地元の音楽を記録に残そうと、重い機材を持ち山に入り、このような音楽を録っていくのです。そして、人は集まりませんが、毎晩、水曜日と土曜になると、町の広場に行き、伝統音楽を踊り、町の人たちに一緒に踊ろうと呼びかけています。これが、先ほど紹介した人たちです。このカワクボ山が1つの象徴となります。ここに惹かれてくる人たちが多くいるということです。これが、今、聴いている音楽のカセットテープですが、これではなかなか収入が得られなかったということを知っています。

例えば、カワクボ山に惹かれた1人の人物として馬樺 (Ma Hua) という人がいます。この方は上海生まれですが、カワクボ山の自然の美しさに惹かれて、ここに住んだそうです。しかし、亡くなった後、貧困地域に入って文化向上をしたということで、「向馬樺学习」と英雄化されてしまいました。やはり、それも少し違うのではないかと思います。

結論としては、チベット社会のなかで暮らしている雲南のチベット族は、非常に模索しています。地方政府主体の開発ではさまざまな問題点があります。そのなかで、自分たちの文化を自覚しながらやっていくわけですが、そのときに、海外からの関心を引き込みながらやっているということに、1つの特色があるかと思います。

昨日の環境部会で、朱先生が言われた、コミュニティか、アソシエーションかというようなことだと思います。この場合は、アソシエーションであるNGOがコミュニティである村落のなかに入って、自分たちの文化を自覚していくという動きだったと思います。

時間が少しオーバーしまして、駆け足でしたが、私の報告を終えたいと思います。

○座長 谢谢上田教授! 上田教授是历史学家, 他所做的研究在我们人类学学者看来, 也是很标准的人类学研究, 非常感谢。下面我们邀请園田教授发言。